早稲田大学臨床心理学研究　第 20 巻　第 1 号　p.43～49

展望論文
Review

心理療法理論の統合Ⅱ：認知科学との架け橋

井原 成男　早稲田大学

Integration of theories in psychotherapy II: A try to bridge my formerly proposed theory to some topics in cognitive science.

Nario IHARA (*Waseda University*)

In this article, the author discussed 4 topics in an attempt to bridge the gap between the integrated theory of psychotherapy, as proposed in a previous article, and cognitive science. The author asserted that independent human activity is the most valuable and fundamental function in psychological activity, and created the term “Agency of Independence (AoI)” to describe this concept. Topic 1 addressed the discovery of mirror neurons, and facts related to the proposed theory were discussed. In Topic 2, the author proposed that the unconscious should be viewed as a spectrum between consciousness and unconsciousness, and emphasized the merits of this perspective. In Topic 3, the author discussed the container and the environment as illustrated in Formulation III of Figure 1, and proposed that holding or receiving is the most essential function in psychotherapy. In Topic 4, the author discussed the role of meta-cognition in psychotherapy.

Key words: agency of independence (AoI), mirror neuron, conscious-unconscious spectrum, container and environment, meta cognition

Waseda Journal of Clinical Psychology
2020, Vol. 20, No. 1, pp. 43 - 49

筆者は，先にこれまでの治療経験を 4 つの公理として定式化した（井原，2018）。

本稿ではそれをさらに一つの図式に統合して説明し，それによって見えてくる立場を超えた統合理論を提案したい（Figure 1）。

筆者はかつてそれこそ第一世代の CBT から出発したが（井原，1982），この分野には長らく関わる機会がなかった。そうした目から見ると現在の第 3 世代の CBT は隔世の感がある。とりわけ ACT（Acceptance and Commitment Therapy）は，通常の対人関係療法と共通項が多く，また，治療主体が理論的にも側におかれており，患者（client）に主体をおいた理論構成を持つという意味で，治療者側が患者に理論を押し付けるという，これまでの心理療法が侵しがちな弊害を避けうる理論構成を持つと考える。

こうした作業を行うことで，逆に認知科学的な基盤に立った心理療法にこれまで我が国で培われ蓄積されてきた対人関係療法的な知見の取りこぼすことのできない宝を，今後心理療法を学ばれる人々への正しい道標として示すことができるのではないか。本稿では筆者が考える方向性を示したい。

まず，Figure 1 に示された公理Ⅰから公理Ⅳを簡単に説明する。

公理Ⅰに，自我あるいは自己と他者の関係を図式化した。自我ライン（Ego line）とあるのは自己と他者が独立したものとして現れる層であり，この図を上から見るとそれぞれの人は独立した個体である。このラインにおいて受容や共感は，認識によってのみ可能である。自己ライン（Self line）とは，人間の心がもともと関係性を元に形成されてきたという考え方であり，Jung のいう普遍的無意識の層ともいえる（Storr, 1983）。ただ心は，自我と自己の両方をバランスよく使えることが必要であり，心はこの自我と自己の軸をアクシスとして機能している（河合，1977）。一般心理学においても，北村（1962）の「主体的自我が客体的自己に働きかける」という自己概念の考え方が，この図式を包摂しており，全ての立場から受け入れやすい。公理Ⅰは，ミラーニューロンの発見によって，いまや大脳生理学的に説明可能である。

公理Ⅱでは意識－無意識をライン A とライン B に分けて考える。A は意識と無意識を分けるラインであり，ライン A の下に来る部分は個人的無意識である。現代においてこの層は例えば PTSD や虐待の，忘却され抑圧された事実を考慮すると受け入れやすい。もう少し通常の例でいえば，幼少時期の家族内での対人関係のダイナミックスがここに入る。ライン B の下層にくる

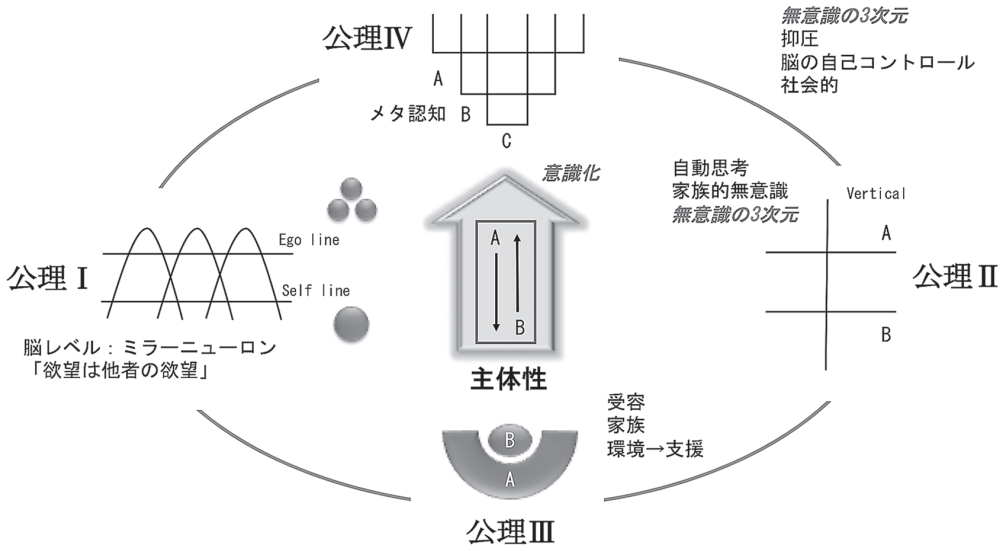

Figure 1　心理療法理論統合のための概念図―井原（2018）の改訂。

注）公理Ⅰに「欲望は他者の欲望である」と書かれているのはラカンの言葉である（向井，2016）。臨床場面で，過剰適応してきた不登校児童・生徒など見ると，自分の欲望ではなく，親の欲望（願い）を生きてきた子を目にすることがある。他者とはそうした大きな影響を及ぼすものである。

のは，Jung のいう普遍的無意識の層である（Storr,1983）。これは個人の実際の体験を超えた象徴的世界であり，遺伝子や文化のシステムの中に組み込まれ，外的な事実や文化と内的なイマジネーションがシンクロナイズすることで発現すると考えると理解しやすい。

A ライン下の無意識はそのほとんどが，当人が考えてもみなかった自身の家族の力動的なダイナミックスによるものであり，現在の主訴や問題行動のみでなく，簡単な家族情報（できれば生育歴）がわかれば特に解釈する必要もなく現在の症状や行動の意味付けが立体的になり，治療戦略もより有効なものになる（ここには，あえて環境調整や親との関係の改善には踏み込まないという選択も含まれる。意識しないことと，意識した上で扱わないことは異なる）。次に B ライン下の無意識は，脳科学の発達による知見やかなり深い人格論である元型 Archetype 論に対する戦略を有効なものにするであろう。脳科学的な知見は，従来，回復不能とされた脳に対する回復訓練や ADHD で立証された心の薬物療法を，人間が意識的には働きかけることのできない最も深い層への働きかけを可能にするものとして再定義できる。

こうした選択は主体によって意識的になされるものであり，公理Ⅱの図式の A ラインと B ラインを貫く vertical な主体的選択として表現されている。ここでの主体は意識－無意識のスペクトラム上にある主体（矢印「⇧」で示される。

公理Ⅲは心理療法において，前提事項である支持と支持されることであるが，それにはいくつかのレベルがあることを示す。その人が心の内界に持つ対象のイメージが変わらなければ，どのように外界の働きかけがあろうとも心は変わらない。そうした意味で，内界を優先する Bion の考え（Lopez-Corvo, 2003）を援用し，contained（B）－ container（A）つまり，「中身」と「容器」という具体的にイメージしやすい用語で説明した。

A，B は連続体をなし，人間的環境としては母やその代理者に抱えられ支持されること，そして最後には，経済的，制度的支援などの外的な支持が続く。こうしたコンセプトを Figure 1 の公理Ⅲの形で表わす。支持するものが A，支持されるものが B である。これはサポート論・支援論としてソーシャルワークや福祉論にまで繋がる。

公理Ⅳは，ビッグ・バン以来，悠久の時の流れの中で主体が運動（変容）し，私・自己・自我そしてアイデンティティを作り出そうとする心の運動を示す。その運動を Figure 1 の公理Ⅳのように図式化した。それは，たえず客体を対象化する主体の運動である。ここでいう客体は世界でありまた他者である。A は B によって客体化され，客体を対象化することによって B は主体となる。また A をも含むようになった B は今度は C によって客体化され，そのことによって C は新たな主体となる。この運動は連綿と継続して行く。これは認知科学でいうメタ認知に等しい。本論ではそれを，哲学的には遺棄されがちな考え方である「無限後退」ではなく，主体による能動的な働きとして捉える。Figure 2 に示した主体のプロセスである（飛梅，2007）。

4 つの公理を筆者は公理ⅠからⅣまでの順に作り上

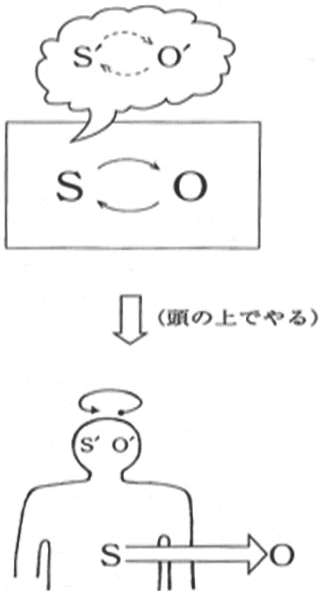

Figure 2　黒田による主体性の理解（飛梅，2009）。
注）S は主体，O は客体である。そうした現実の関係が頭の中で，S′ O′ の相互作用として概念化され，そうしたプロセス全体が主体化されることを示している。

げ，図の中央にある上向きの矢印「⇧（AoI）」に最後に到達したが，今はむしろ，この中央の矢印「⇧」は次元をひとつあげて 4 つの公理の中心でそれぞれの公理に関連しながら機能するものであり，公理のそれぞれに関連づけ，ペアで考えた方が心の現実に近いのではないかと考えるに至った。そうした意味で，本稿はこの上向きの矢印に関する論考，主体性論から始めたいと思う。

Ⅰ　主体性（AoI）とは何か

主体という言葉は，科学の中ではあまり流行らなくなった。それは主観的という，科学が最も嫌い恐れるものである。主体性は subjectivity の訳であり，主観的という誹りを免れない。Subject には臣下が従うという意味もあり，ますます分が悪い。私はこうした負の烙印を押された語ではなく，主体性を independence と呼びたい。周りに従う，あるいは独りよがりの独我的なものではなく，自立しているというニュアンスを持たせたいからである。そしてそれを機能的に表現するために，agency of independence，略して AoI（独立機能）と表記したい。このことで主観という言葉の持つ主観的で受け身的なニュアンスを取り去り，言葉通り能動的で積極的で前向きな意味を持たせたい。このように主体性を定義することで，状況に影響され埋め込まれているものの，そこからの自立性を持つ主体という意味付けを際立たせたいのである。

AoI は AI（人工知能）に，期せずして似た略語になった。けれど私は，人工知能と人間の能力を決定的に分けるのは人工知能には人間の持つ主体性が欠けていることだと思う。主体性とは創発性であり，ビッグ・バン以来，変容を継続させてきた歴史性，一回性それ故の個人性であり，それを AI は持たない。AI は知的な技術ではすでに人間の持つ能力など超えており，計算ミスもない。しかし生命という連綿と変容し続けた豊かなカオスを持たない。プラス・アルファーを持たないといってもよい。

かつて「クローン人間は自分と同じコピーを生み，気持ち悪いから嫌だ」とする議論があった。しかし，生まれてきた時点の人間 a は作れても，その後を生きてきた結果としての人間 $a_1, a_2, \ldots a_n$ は作れない。かつて血は争えないという言い方で言っていた事態を「DNA だねぇ」と評する言い方で科学的な装いをまとわせたかに見える言い方は，この変容の歴史性の積み重ねを，また連綿と続く生命の個性を無視した言い方である。地球上に私たちの主体性が実在する場所を想像してみよう。地球外から届く粒子は私たちが実在しない場合は直線として地表に届く。しかし，私たちがそこに実在することでプリズムを通過する光のように屈折する。それが，主体がここに実在することの物理的な意味である。

したがって，個々の実在は物理的に見て人間$_1$, 人間$_2$…人間 n という無限の個性の集合である。個々の主体は掛け替えのない自分の場所を占有しており，人間として集合的にくくることはできない。代えは利かないのである。これが個性の外的に見た実在の現実である。個人ということを捨象しがちな科学の結末は，こうした個々の物理的実在を考慮しなくなることである。戦争で n 名死んだコロナで n 名死んだという言い方はその一人一人，人間 a_1，人間 a_2 の連綿と続いてきた生命を見えなくする。すべては人ごとになり，次第に人々の掛け替えのない個別性を見えなくさせる。ついには全てを「人ごと」のように捉えさせるに至る。それは，人ごとであれば気にしないという心情への「客観性（正確には客観主義）」の侵入を許し，親密性も次第に軽んじていく。科学的に見てさえ，先に見たように個性を捨象したクローン人間への恐れや AI への無用な恐れを生み出す。

こうした考え方を 4 つの公理の図の中央に「⇧」で示した。人間の特性上はじめ A の方向として受容的に input され，B のように output されていたものが，さらに生物に本質的な運動という本性，あるいは運動（変容）という本性によって環境に働きかけずにはおれない，そういうものとして人が自然に持つ底力を「⇧（AoI）」で表現した。こうした動きかけこそが positive ということの本質である。

心はたえず運動の中で，客体を対象化する主体の運

動である。ここでいう客体は世界でありまた他者である。A は B によって客体化され，客体を対象化することによって B は主体となる。また B は C によって客体化され，そのことによって C は新たな主体となる。この運動は連綿と継続し，この流れの中で主体感が形成され「場」は埋められて行く。しかもそれは哲学的に遺棄される無限後退ではない。

これを生理的に見てみる。Held と Hein（1963）は実験用に作られた装置を使って，「一匹の子猫は能動的に運動することができず，他の一匹の子猫の運動により，受動的に動かされるだけであった。この装置で実験した結果，活発に運動した子猫のみに知覚が発達したが，受動的に動かされた子猫は，事実上盲目であった。活発に運動することは，知覚の発達に欠くことができない」という結果を得た（Held & Hein, 1963）。この実験は現代の福祉工学においては人間に応用され，人間においても能動的に環境に関わることが環境の知覚において重要であることが実証されている（鈴木他，2020）。「介」の中に書き込まれた矢印 A と B が受動性と能動性にあたり，主体はその結果，対象に働きかけ，知覚が発達する。

これを心理・認知的に見ると，知覚 perception と統覚 apperception ということである。脳科学者である嶋田（2019）は『越境する認知科学』の中で，projection と back-projection という驚くべき対概念を提出している。対象は脳に投影されるだけでなく，またその対象に逆投影することによって，対象をさらに鮮明に知覚するというのである。知覚という機能はそうした交互作用によって発達し確立されるという論である。哲学的にも，廣松（1982，1995）は，所記と能記を超えて主体は etwas anderes（それを超えたもの）を見ると述べる。

またこれを社会的に見ると，吉本（1968）は，『共同幻想論』の中で，村人が森の中に入った時に疲れた入眠状態でおこる幻覚を論じる中で「既視現象」にふれ，「＜既視＞はこの場合にも，極度の疲労によって対象的判断力が低下し，それにともなって外界への意向を喪失し，同時に，視覚的な受容と受容したものを了解することの間に＜隔たり＞が生じたために＜私が視たもの＞を，あらためて＜私＞が＜視る＞ということ」であるとして，社会的に見た既知を視覚の生理的プロセスから説明可能であるとする。

三浦（1976）は言語学的な視点から，このプロセスを時枝（2007）の「言語過程説」を援用しつつ，主体（言語学的に言うと主語）の所在として明確化した。吉本（2001）もまた，こうした系譜を踏まえて，対象に対する主体の運動を言語論的な観点から自己表出と指示表出として定式化し，主体の在処を，言語という人間の心の現実態として捉える見方を提示している。こうした主体と客体の関係は，それ自体を客観主義的に描くものでなく，主体自身の自己運動としてダイナミックに捉えなければならないとしたのが，黒田の主体性論であった（Figure 2）（飛梅，2009）。

先に Figure 1 の中央「介」に示した客体を対象化する主体の運動は，心のダイナミックスの自然な発露であり，そうした運動によってのみ私たちは心を創成する。こうした営みは，対話を技法の中心とする心理療法の核心をなすものであり，こうした運動の中でこそ主体的に捉えた自己・自我・私そしてアイデンティティは健常に形成されて行く。こうしてセラピスト自身が主体的に関わる対話こそが，真に健康な主体を client の中に移植し創成して行くのである。

Ⅱ　公理Ⅰの他者理解と認知科学的展開（トピック 1）

心理療法において最も基本になるのは，自我あるいは自己と他者の関係性を，いかに修復して行くかである。Client は，共通して自我あるいは自己認知による傷の結果，間違った認知をしている。この傷つきは他者との関係性の中で修復されるべきものであり，心理療法においてそれを可能にするのは，セラピストの共感（Rogers,1957）である。傷ついた Client は共感という通路を通じて，これまでの他者との関係を修復する。共感は，公理Ⅰの自我ラインにおける認知（自己認知，他者認知）に基づいたものから，あらかじめ心に組み込まれたものまでを含む広範でトータルなものとして位置づけられる。認知行動療法の他者理解は自我ラインでおこなわれるものであろう。

CBT，とりわけ Social Skill Training や Stress Management，Anger Management そして Assertion Training などの習得により対人関係は改善される。他者が推測しやすい，あるいは対応しやすい反応になるからである。しかし，それらの技法は一般的な心の発達の中に位置づけ直す必要がある。そうした総合的な理解によって，例えば，発達障害児に自己が現れたときの戸惑い（内海，2015）などの支援も可能になる。

脳科学におけるミラーニューロンの発見は人間の他者感に大きな影響を与えた。

ミラーニューロンとは，自己が運動するときだけでなく，他者が運動しているのを見たときにも活動するという特性を持つニューロンである。はじめ猿の運動前野（F5）で見つかり，後に人間の運動前野，一次運動野，下頭頂小葉でも起こることが確認され，ミラーニューロン・システムと呼ばれるようになった。取り入れによる選択には，①自分に既知のものを取り入れるか，②未知のものを取り入れるかという違いがあり一貫した結果は得られていない（嶋田，2018）。自分が知っている既知のものに反応するという結果と，知らないものに反応するという矛盾した結果が生じるのである。しかしこうした矛盾も，単純に脳科学的に考え

るのではなく，先に論議した主体（AoI）が既知のものか，未知のものかを選択しているという媒介項を入れることで解けるのではないかと考える。

脳科学における矛盾した結果は，かなり，この主体を考慮することで，より合理的に理解，解釈できる。

Ⅲ　公理Ⅱにおける意識と無意識のスペクトラム（トピック 2）

無意識の存在に疑う余地はない。第一に日常生活の中で心や行動について語るとき，「無意識に」という用語を使うのは自然であり，この用語は心理療法のどの学派に属する人でも自然に使う，ある種のコモンセンス的な感覚である。第 2 に Libet（1983）の実験以来，幾多の実験の中で，意志の知覚（意識）に先立って脳が活動し始めているということが証明されている。第 3 に，公理Ⅰで述べたように心の形成に他者の存在は不可欠であり，ミラーニューロンの存在や心の間主観的な発達（Stern, 1985）を考えるとき他者を捨象することは非現実的である。心理療法において他者の存在は不可欠であり，CBT においても他者とりわけ大切な他者からの報酬（褒められること）は最も強力な強化子である。

こうした概念を包括的 comprehensive に捉えるために，筆者は意識 – 無意識をスペクトラムとして捉えることを提唱したい。こうした捉え方によって，①トラウマなどによる抑圧以外のいわば健康な無意識はあるか，②自動思考は無意識（前意識）なのか，③脳科学が明らかにした脳独自のコントロールプロセスを無意識と同一視してよいか，などの問題を生産的に論議できると考える。

筆者が提唱したいもう一つの発想は，A ラインの無意識はそのほとんどが，当人が考えてもみなかった自身の家族の力動的なダイナミックスによるものであり，現在の主訴や問題行動のみでなく，簡単な家族情報（できれば生育歴）がわかれば特に解釈する必要もなく現在の症状や行動の意味付けが立体的になり，治療戦略もより有効なものになるということである。

夢分析は心の深層のシグナルとして，意識的に利用可能なヒントであり，元型論は自身の核となる性格傾向を知り，自分自身の傾向を知る手がかりになる。こうした層的な考え方は，心の層を脳の発達に対応させ，①意識を新皮質②無意識を旧皮質（現在でいえば，辺縁系）そして古皮質と対応させる Kretschmer（1950）の考え方に通じる。Kretschmer は，Freud の無意識にたいする考え方をかなり早期から認めた医学者であった。最近では，脳科学者の小泉（2011）が，無意識（エス）と脳構造（辺縁系）を対応づけて捉え直すことの重要性を再評価している。脳科学的な知見は，従来，回復不能とされた脳に対する回復訓練や ADHD で立証された心の薬物療法を，人間が意識的には働きかけることのできない，最も深い層への働きかけを可能にするものとして再定義できる。

こうした選択は意識的になされるものであり（Figure 1 中央の「⇧」），公理Ⅱの図式の中核とも言うべき A ラインと B ラインを貫く vertical な主体的選択として表現されている。ここでの主体は意識 – 無意識のスペクトラムのさらに上の次元にある主体である。縦のライン vertical line は，心の認知的な機能を表わす。無意識は決して心の知りえないものではなく，自由連想法や夢の分析を通じて接近することが可能であるという意味で，認識可能なのである。また普遍的無意識の層にしても，夢や神話によって到達しうる能力を心はもっている。Bion は，心が治癒して行くプロセスにおける力を「知ること knowing」として定式化した（Lopez-Corvo, 2003）。Knowing もこの縦ラインの力として理解可能である。

最後に，Halbachs（1994）の論をもとにして無意識の社会的次元について考える。記憶や言語という意識的なものだけでなく社会的な次元はまた無意識において再構成され，伝統の中に受け継がれていく。しきたりも廃れてはいるが，形を変えながら風土という形で残され存在し続けている。それはまたその時代の皮肉や夢に現れる。ナチス時代という極限まで統制された世界において流行っていたジョーク，例えば「ハイルヒトラー」を茶化した動作，映画の中でチャプリンが演じた滑稽さの映像やその時代の人々が頻繁に見た夢や希望の語りの中に，あるいは芸術にさえ，時代精神として刻まれている（宮田，2002）。

公理Ⅱを覚えやすくするために Transcendence vertical（Tv と略記）と名付けておく。この公理で強調されているのは無意識の 2 層よりむしろそれを貫き意識化する縦の vertical な働きである。ここにⅠで述べた AoI（主体性）が関与していることはいうまでもない。[注)]

Ⅳ　公理Ⅲにおける抱えることと環境（トピック 3）

心理療法において，対象を支持するということは，技法を超えた前提事項である。しかし，支持にはいくつかのレベルがある。例えば，その人が心の内界に持つ対象のイメージが変わらなければ，どのように外界の働きかけがあろうとも心は変わらない。筆者はそうした意味で内界を優先する Bion の考える contained − container（中身と容器）という具体的にイメージをしやすいモデル（Lopez-Corvo, 2003）で公理Ⅲを図式化した。Bion の理解は乳児という中身を contain する母親のモデルとして説明され，乳児（そして人）はそうされることで自分の心を持ちこたえられるようになると理解される。

この支持の考え方は Winnicott 的にいうと holding ということになるが，正確に言うとレベルの違う支持の

形である。Bion の contain が，あくまでも内面レベルのものであったのに対して，Winnicott の理解は，内界における被支持感と同時に，実際に外的・環境的に母親が赤ちゃんを抱っこし，時として入院という形であれ施設自体が支えるという outer な部分を併せ持っていた。ここに，内界をみる精神分析家であると同時に，最後まで小児科医としての診療を継続した Winnicott と分析のみ行った Bion の違いがある。Winnicott（1971）の holding は，発達心理学の中に無理なく取り入れやすい科学的な概念としての資格を持ち，Klein 派と一般的な科学を繋ぐ，独立派の面目躍如の感がある。移行対象を軸にした Winnicott（1971）の inner-outer の二重性として心をとらえるスタンスには，超越論的な他者との出会い（Levinas,1995）を説く哲学的な視点（井原，2014）さえ感じられる。

この連続体の最後に，内面のみでなく経済的，制度的支援などに代表され，外的な支援という形で総括できる外的な支持が続く。こうしたコンセプトを図の公理Ⅲのような形で表わすことができる。支持するものが A，支持されるものが B である。

公理Ⅲは，人が母の中に宿ったときから開始され，母の腕に抱かれ，家族の中に場所を得，そしてやがては自分が生きている時代の中に場所を得る，そのような営みの中で，いかに周囲から支持されることによって生きていけるかということである。支持とは心理療法における基本であり，またサポート論・支援論としてソーシャルワークや福祉論にまで繋がって行く。これはさらにいうと container を支える外的環境ということである。最初は子宮という環境，次に母親に hold される potential な空間さらに家族そして最終的には時代という環境が自己を支えている。こうして見ると，自己はまさに環境に組み込まれ，環境に拡張されたた自己なのである（Clark,1997）。

関係性が心理療法の一つの潮流になり，いずれの流派であれそのことを念頭に置かないことは不可能である。しかし，関係性とは相対性理論の「光」にも似て，極めて不安定なイメージを持つ。こうした関係性の不安定さに確固たる基盤を与えるのが，公理Ⅲの容れ物という考え方である。人間の関係性が破壊され，インターネットという光の世界が，時空の中の生きた関係性に取って代わられつつある現代において，時空を支えるものとしての容れ物という発想は，破壊された環境の中で育ち，孤立した世界を生き，その裏返しとして非現実的に共感を志向する（それは非現実的な願望であるが故に，必ず裏切られる）人々に対するとき極めて重要な治療姿勢である。空間が変容し，人間で言うと経年によって消え去ろうとも，それは消滅ではなく不変であるという量子力学の教える事実は，時とともに何かが消滅するという考えに対峙する深い安心の世界を与える。

Ⅴ　公理Ⅳとメタ認知的働きかけへ（トピック4）

私たちがこの世界で，歪むことなく一つの凝集性を持って生きるためには，主体性を持って対象に関わることが必要である。図の公理Ⅳに示したようなダイナミックな形で客体を対象化することは，心のダイナミックスの自然な発露であり，そうした運動によってのみ私たちは心を創成する。

公理Ⅳは，人が一人の人間として，物質的にはわずかに2，3ヶ月ほどでほとんど総入れ替えされるにすぎない存在である（池谷，2007）にもかかわらず，一つの連続した個体の上に営みを続けるかけがえのない主体として，いかにして対象を，ひいてはこの世界を我がものとして構成して行くのかという主体性論である。心理療法的にいうならそれは，つまずきや病気によって失われた主体性を，いかにして治療者という特別な他者に支えられながら協動し，やがては真の主体を獲得して行くかという再生のテーマである。

熊野（2011）は心理療法におけるメタ認知的きづきを「否定的な思考や感情を，自分としてではなく心の中の一過性の出来事として捉える認知過程」と定義している。公理Ⅱのところで，意識－無意識というスペクトラムを貫く意識を vertical な働きかけとして定式化したが，これは主体の心への力強い働きかけと表現できる。同時に，CBT でいうメタ認知に近いと考える。例えば，虐待の連鎖など，乳幼児期に受けたトラウマ的な経験を心理療法で克服できるのかという問いかけに対して，EMDR 的な脳そのものの持つ回復能力に依拠する方法，あるいはその方法と組み合わせながら，自身の体験をメタ認知的に主体が認識し直すという方法が有効である。その方法は，動物では不可能な非可逆的な体験を人間はメタ認知できるが故に苦しむと同時に，そのメタ認知を主体的に捉え直すことのできる存在であるという位置づけが可能である。

主体はその本性として，絶えず運動していく。それが内的にとらえた心のプロセスであり，トラウマチックな出来事として無限後退的に悩んでいた思考を，認知的な主体性として，我がものにできる，CBT の概念を使うならばコントロール出来るということではないだろうか。

注：AoI と表記した主体性と込みにして，公理Ⅰを Transcendence horizontal（Th と略記），公理Ⅲを Transcendence contain（Tc と略記），公理Ⅳを Transcendence meta（Tm と略記）と表現した。Transcendence（超越）としたのは4つの公理を統合した超越的次元にあるという意味である。

引用文献

Clark, A. (1997). *Being there. Putting brain, body and world together again.* MIT Press.
（クラーク，A. 池上 高志・森本 元太郎（監訳）(2012). 現れる存在—脳と身体と世界の再統合 NTT 出版）

Halwachs, M. (1925). *Les Cardes de La Mémoire.* Paris. Librairle Alca.
（鈴木 知之訳（2018）. 記憶の社会的枠組み　青弓社）

Held, R. & Hein, A. (1963). Movement-produced stimulation in the development of visually guided behavior. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, *56*(*5*), 872-876.

廣松 渉（1982, 1995）. 存在と意味. 上・下. 岩波書店

Iacoboni, M., Woods, R. P., Brass, M., Bekkering, H., Mazziotta, J. C., & Rizzolatti, G. (1999). Cortical mechanisms of human imitation. *Science*, *286*(*5449*), 2526-2528.

井原 成男・大上 良隆・矢澤 圭介（1982）. 場面緘黙児に対する行動療法的接近 - 象徴的モデリングと系統的脱感作の併用　行動療法研究, *8*(*1*), 36-44.

井原 成男（2009）. ウィニコットと移行対象の発達心理学　福村出版

井原 成男（2014）. Winnicott における生き残ることと対象の使用の逆説　お茶の女子大学人文科学研究, *10*, 57-67.

井原 成男（2018）. 心理療法理論の統合：「心理療法 4 つの公理」からの発展　早稲田臨床心理学研究, *18*, 93-99.

池谷 裕二（2007）. 進化しすぎた脳　講談社

河合 隼雄（1977）. 無意識の構造　中央公論社

北村 晴朗（1962）. 自我の心理　誠信書房

小泉 英明（2011）. 脳の科学史　角川書店

Kretschmer, E. (1950). *Medizinishe Psychologie.* Georg Thieme Verlag.
（クレッチマー，E. 西丸 四方他訳（1955）. 医学的心理学Ⅰ・Ⅱ　みすず書房）

熊野 宏昭（2011）. マインドフルネスそして ACT へ　星和書店

Lévinas, E. (1995). *Alterité et transcendance.* Fata Morgana.
（合田 正人・松丸 和弘（訳）(2001). 他性と超越　法政大学出版局）

Libet, B. C., Gleson, C. A. Wright, E. W., & Peal, D. K. (1983). Time of conscious intension to act in relation to onset cerebral activity. *Brain*, *106*(*3*), 623-642.

Lopez-Corvo, R. E. (2003). *The dictionary of the work of W. R. Bion.* London: Karnac Books.

三浦 つとむ（1976）. 日本語はどういう言語か　講談社

向井 雅明（2016）. ラカン入門　筑摩書房

宮田 光雄（2002）. ナチス・ドイツと言語 岩波書店

Rogers, C. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, *21*, 95-103.

嶋田 総太郎（2019）. 越境する認知科学 1 脳の中の自己と他者：身体性・社会性の認知脳科学と哲学　共立出版

Stern, D. N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant.* Basic Books.

Storr, A. (1983). *The essential Jung.* Prinston NJ, Prinston University Press.
（山中 康裕監修（1997）. エセンシャル　ユング　創元社）

鈴木 利友・須貝 成芳・岡崎 甚幸（2020）. 迷路空間における移動方法と注視行動の関係に関する研究：能動的探索歩行と車椅子による受動的移動の比較を通して. https://home.csis.u-tokyo.ac.jp/~arikawa/s-it/4thSITWS020510/PDF-4sit/4sit-hip-03-ppt.pdf

飛梅 志郎（2007）. 黒田寛一の教え　あかね書房

時枝 誠記（2007）. 国語学原論上・下　岩波書店

内海 健（2015）. 自閉症スペクトラムの精神病理　医学書院

吉本 隆明（1968）. 共同幻想論　河出書房新社

吉本 隆明（2001）. 言語にとって美とは何かⅠ・Ⅱ　角川書店

Winnicott (1971). *Playing and reality.* London, Tavistock Publications.